

## 農業経営者ルポ

文 牧瀬和彦

# 「この人この経営」第18回

## 「うまい青汁なんてどうですか？」

伊藤ビッグファーム 代表取締役

伊藤隆男さん（49歳）

〒838-0214

福岡県朝倉郡夜須町大字東小田753-1

TEL..0946-42-2241

FAX..0946-42-1807



### 【プロフィール】

1951年3月26日生まれ。卒業後、地元の鶏卵会社に就職。サラリーマンでありながら、家業の水稲で兼業農家。34歳の頃から作付け面積約7haの自作の米を販売。

43歳の時、会社を退社。専業農家となる。46歳の頃、キューサイと出逢い、ケール契約栽培を開始。水稲との転作ローテーションで現在約12ha。伊藤ビッグファーム代表取締役。

### ● コメと転作にケール

取材にお伺いしたのが11月上旬。圃場整備された水田地帯を通って行った。

水田は、転作のダイズが収穫を待ち、刈り終わった稲の切り株にはヒコバエが小さな穂を付けている。伊藤さんのケール畑には、11月なのに紋白蝶が飛び交っていた。

「少々は青虫に喰われてもいいんです。霜が降るようになれば青虫も凍ってしまいますよ」と伊藤さんは笑っている。

伊藤ビッグファームは、水稲生産・白米販売、ケール契約栽培、肉牛肥育（約20頭）が主な作目である。

自作地は約2ha、借地に10haの水田を集め、水田とケールの輪作を行っている。2年間にケール2作、水稲1作というサイクルだ。

サラリーマン時代、近隣の鶏卵会社に就職していた。勤めをしながら家族で水稲を作り、生産したコメは当初は近隣の農家と同様に農協に出荷し、普通に減反・転作にも参加していた。

しかし、知り合いからコメを売って欲しいと声を掛けられたのを契機に、特別栽培米として自分で精米し、近隣に配達していた。

搗きたての、生産者の顔が見えるコメ

は飛ぶように売れ、自作地だけでは足りなくなり、近隣農家から水田を借地して、気が付いたら7haの稲作兼業農家となっていた。

「うちのお米は2週間で食べ切って欲しいんです」と2キロ、3キロ、5キロ、10キロと小刻みに袋詰めにし、注文を受ければ毎週でも配達に行くという接客態度は今でも続いている。販売単価も、数量にかかわらず、均一して500円/キロ（税・運賃込み）である。

今では、自宅に小型の精米プラントと、定温倉庫を施設し、「いつでも好きなだけ、美味しいお米を食べてもらいたい」と全量を自分で売りさばっている。

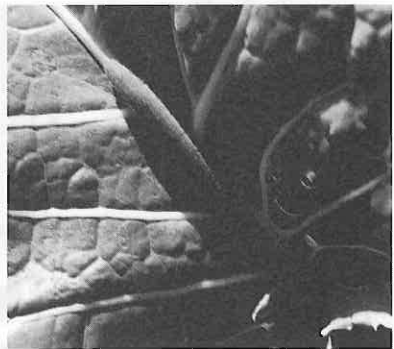
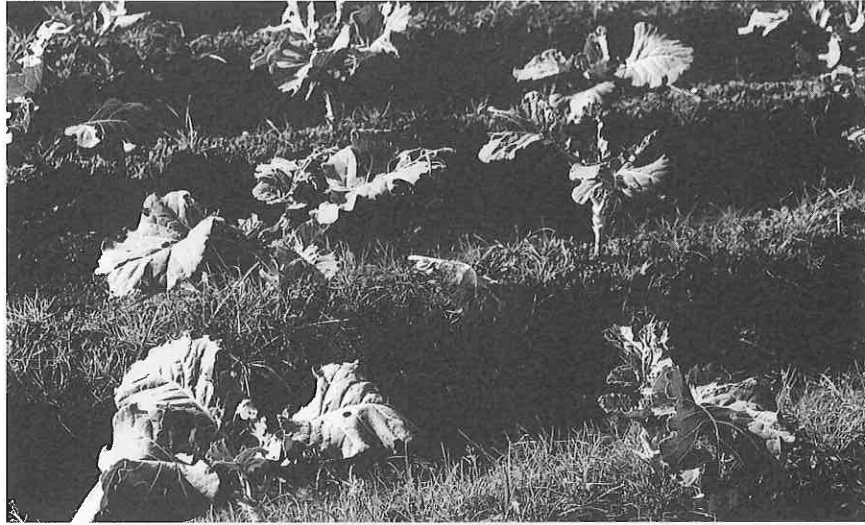
サラリーマンとの兼業に見切りを付け、コメ一本で専業農家を目指したのも、お米を毎回注文してくれるお客さんが大勢いたことが大きな後押しとなった。

食べる人の近くで、美味しいものを作り喜んでもらう喜びは、その安全性についても感心を深めていった。食べる人よりも農業に多く接する生産者の方が敏感になるのは当然だ。

できれば、無農薬で生産できないか？ そのためには健全な土づくりからしなければならぬ。

無農薬・有機栽培に真剣に取り組むコメの経営に邁進していた。

水稲の栽培面積を増やすために借地を



ケール畑。CMのおかげでときどき盗まれてしまうケールの栽培情報板（生産者名・管理情報が記載されている）

する。借地をすれば転作も必ず付随してくる。地域としては転作物物に大豆を推奨しており、共同で作業組合を作って転作を消化しているが、伊藤さんは、大豆ではなく、ケールを栽培して、三年目になる。

ケールとは「まずい！でも、もう一杯！」のCMでお馴染みの「青汁」の原料である。

キャベツやブロッコリーの原種だと言

われ、健康飲料として注目を浴びている。

伊藤さんは、ケールは全量を青汁メーカーのキューサイに契約栽培して出荷している。青汁はケールをそのまま搾って呑むものであるため、残留農薬には特に神経をとがらせており、「無農薬・無化学肥料」「有機栽培」を条件にしているという。紋白蝶が飛び回っているケール畑を見て納得をする。

### ● みんなで赤信号を渡っている

福岡県の減反もご多分に漏れず、年々増加している。コメも人気銘柄さえも価格が下落していく。

地域の営農形態も兼業化が進み、田んぼには年寄りばかりが目につくようになる。

組合員の為に共同で稼働しているはずのカントリーエレベーターも減反が増えると稼働率が下がり、コストが逼迫してくる。コメの新たな販路を開拓するでもない。

組合員の「公平なる負担」がだんだん大きくなり、組勘の中で、初を農協に出荷した時点で、資材費や共済費は即座に差し引かれ、転作物物の依託費やとも補償の負担はコメの販売額を越える組合員も出てくる。

春先に航空防除の予約を取られ、実際に病害が出るかどうかに関わらず、カレンダー通りにヘリコプターは飛んでくる。いつの間にか仕方無しにコメを作っている兼業農家ばかりになってしまっていた。これでは後継者も出来るはずがない。

「皆で渡るからって、赤信号ではトラックに当てられちゃう

ようなものさ」と伊藤さん。

「隣がやるから農薬散布も、肥料も…これでは上手く行くものもいなくなっちゃうさ」

減反も、転作も、補助金も結局のところ、農家に届くころには薄っぺらいものになってしまっている。これから数年先、農村がどうなっているのか？ 自分たちの農業経営がどうなっているのか？ 考えることさえ憂鬱になる、まさに暗雲たれ込んでいる状態だ。

### ● ケールとの出逢い

コメの生産・直接販売も安泰ではない。いくら顔が見える消費者との関係を継続していても、米価水準自体が下がっていくとコストも合わなくなっていく。

無農薬でコメを作るにしても借地で減反に大豆を作られては、思い通りに土壌管理もままならない。

そんな時期にキューサイのケール栽培に出会った。3年前のことである。

契約栽培は無農薬・無化学肥料・有機栽培が前提である。その為には水田の土壌管理に全神経を注がなければならぬ。

毎年全面プラウをかけ、初ガラ暗渠を施した。幸い、収穫したケールは少々の中虫い

ユメヒカリとヒノヒカリのブレンド米。ダイオキシンの心配から紙袋に移行しているとしている。



の穴が空いていても構わないものだった。

「これほど収穫に手間のかからない生鮮野菜はないですよ」と語る伊藤さん。採った葉が折れていても、形が悪くても、すぐに搾ってしまうのだから、プラスチック箱にどんどん放り込んでいけばいいのだ。

午前中に収穫したケールの葉は、選別することもなく、箱ごとキューサイの工場に自ら運転するトラックで搬入する。契約単価は76・5円/キログラム。一作で10アール当たり7トンぐらい、多い生産者は10トン収穫できるという。

収穫作業は後継者の長男（26歳）を含む家族4人と通年パートタイムが2人。繁忙期にはさらにシルバー人材からの派遣を受けて行う。毎日午前中4時間程度



を、時給700円で喜んで手伝ってくれ

る。何度か挑戦したがなかなか安定した播種・育苗ができなかつたので、苗だけは現在はキューサイのケール育苗場から1700本/10アールを単価9円で購入している。

キューサイが推奨している有機肥料の銘柄があるが、伊藤さんはキューサイと相談して、自分で選定した銘柄の有機肥料を購入している。肥育牛の堆肥も利用している。

来年には3年目の完全無農薬作付けとなり、有機認定表示制度に基づく有機栽培の認定を取れるという。

今年の夏、生産量が追いつかず、ケールと偽ってキャベツを納入し、「ケール

100%』ではない青汁を販売してしまつたという事件が発覚した。伊藤さんとは別の生産グループの出荷・納品したものだった。

その事件をキューサイは速やかに公表し、消費者に謝罪をした。同時に、該当する時期に青汁を購入したお客様には代替の青汁を無量で送付した。

その不名誉な騒動の後、キューサイは、原料のチェックを厳しくし、さらに、無農薬（残留農薬）や有機栽培の施行のチェックを厳しくするマニュアルを発表した。

しかし、その後、青汁の販売量は8%伸びているという。

汚点を付けた青汁ではあるが、消費者ニーズは伸びているのである。

また、一種のブームを呼び青汁以外にも複数の飲料メーカーが生野菜ジュースに「青」の字を冠して発売しており、健康志向の高い読者を持つ雑誌でも「青汁系」と紹介している。

健康や青汁が単なる健康ニーズに受け入れられた流行と見ることもできる。流行がピークを迎えたところには、別の目新しいものが提案される。そうすると消費者はいともあっさりと言汁には見向きもしなくなってしまう。又、完全契約栽培による独占・寡占化によって生産者が身

動き取れなくなる状況になるのではないかと懸念する向きもある。しかしその懸念も伊藤さんは言う。「キューサイだけじゃなくてもいいんですよ。出荷先は」



乾燥して清潔な肥育牛舎。黒毛和種、ホルスタイン、F1がいる。厩肥は堆肥として圃場に使う

取引先に一方的に振り回されないで、ちゃんとした生産をすれば、契約の場や販売の場面に於いても、対等の立場で接することが出来るのだと。

### ● 展望：精神の自由さ

伊藤さんは、農業だけでなく、全てのことに真摯に対応をする人柄だ。コメの小売りするときのパッケージの大きさも「2週間で食べきる量で注文してくれれば」という心遣いからだ。

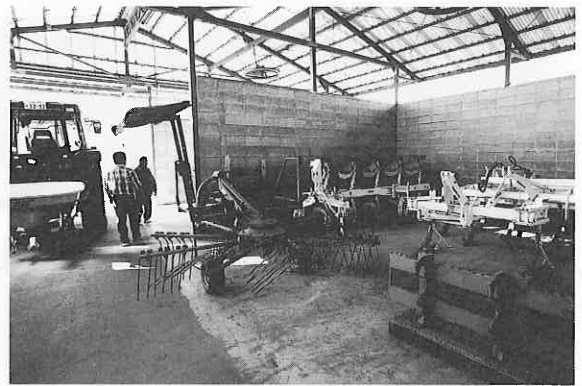
農薬の問題も、実際に農薬を使っている農家本人が一番危険に晒されている。そのことを日常感じ取っている農家は、自分で食べる野菜には農薬を散布しない。販売するの野菜には必要以上に散布するの。

そのことの疑問が無農薬栽培への感心を深め、「自分たちが食べるものをお客様にも」と経営全体を安全性を高める方向へと動かしていった。

「青汁も、いつまでも『まずい』じやだめだとは思ってはいるんです」と言う伊藤さん。そのため硝酸態窒素の含有量には神経を使っている。

キュウサイとの契約条件では、硝酸態窒素は500 ppm以下でないと納品できない。伊藤さんのものは300 ppmしかない。

「量を追うと、量が穫れないんですよ」



整備されて整然と出番を待つ作業機

水田の輪作でケールを作っているから気付いたと言う伊藤さん。

「大抵の農家は量を少しでも多く採りたくて窒素肥料を余計に入れてしまうんです。人情としては判るんですけど」

ケール栽培の先進地では、畑で連作しているためか、病害虫が出やすいと言う。また、ついつい収量を多く採りたくなり、悪いのを知りつつも農薬や化成肥料を散布してしまう生産者があつたらしい。

伊藤さんのケールは、水稲との輪作が功を奏したのか、病害も比較的少なく、硝酸態窒素も上がらないで生産ができています。

肥料バランスが崩れると、病気にかかりやすくなってくる。結果的に量も穫れ

なくなるし、まずいケールになってしま

う。ちゃんとして栽培すれば、青汁だって美味しくなるのだという。そうすれば『まずい』ケールより一段高いグレードで買い取ってもらうことも不可能ではない。

青汁のラインの関係もあつて、現在は、『まずい』ものと混ぜられてしまう。ラインの数量を聞いてみたら、100 ha規模の栽培があれば別ブランドで『まずくない』青汁も確立するだろうとのことだ。100 haというと、伊藤さん一人ではとても作りきれない。そこで一緒に、しかも、ちゃんとした肥培管理・無農薬でケールを栽培しないか？と声をかけている。「そうすれば減反も何も怖いものはないですよ」と笑う伊藤さん。

お話を伺いながら、ケール畑を見て回る。牛舎には肥育牛が足を伸ばして反芻

をしている。機械庫には稲刈りが終わって、きれいに整備・洗浄されている大型コンバイン等が整然と格納されており、油染み一つない床だった。

「今日は町内の



伊藤さんの奥さんとお孫さん。すこやかな寝顔がかわいらしい

「マラソンだったんですよ」とケール畑の前で運動服姿を気にしながら撮影を受けている。伊藤さんと接していると、穏やかだけど的確な言葉が返ってきて、落ち着いた心持ちでお話することが出来る。「9人目の孫なんです」と子守をしながら奥様も笑顔で会話を混ざってくる。専業プロ農家が往々にして漂わすピリピリとした緊張感や、悲壮感を一切感じさせない雰囲気は何なのか。既存の習慣にとらわれず、しかし奇をてらうことなく、家族一緒になって、楽しく経営を行っていけるのは、伊藤さんご自身の人柄に寄るに他ならない。何者にも束縛されない精神の自由さを兼ね備え、それをしなやかに具現化していく。しかし、流行ものだからといって押し流されない確固としたそんな伊藤さんなりの「スタイル」を持っているからだと考える。

(牧瀬和彦)